

安川敬一郎と旧安川邸について

1. 安川敬一郎について

安川敬一郎は嘉永3年4月17日（1849年5月9日）、福岡藩士の父徳永省易・母久米の四男として生まれた。16歳の時に徳永家を出て、同じく福岡藩士の安川岡右衛門の養子となり、慶応2年には家督を継いで、敬一郎と改名した。

明治10年に、松本家の養子となった次兄潜とともに、遠賀郡芦屋町で石炭販売を開始（明治19年に若松に移転）した。その後、複数の炭坑を開き炭坑業を拡大し、日清戦争や日露戦争で多大な利益を上げ、明治41年に明治鉱業株式合資会社を設立した。

安川は、長男澄之助を早くに亡くしたが、二男健次郎が松本潜の養子となって松本家を継ぎ、三男清三郎が安川家の跡を取って、五男第五郎を合わせた3人の息子に支えられ、明治41年に明治紡績合資会社、大正4年に安川電機製作所、大正7年に黒崎窯業株式会社を設立する等、事業を多角化した。さらに、明治42年には私立明治専門学校（現在の九州工業大学）を開校し、教育事業にも力を注いだ。

2. 旧安川邸の経緯

安川家は敬一郎の代で、明治7年から炭坑経営をはじめ、明治10年に安川商店を創業し、住居を福岡から芦屋へ移した。その後、若松の発展に伴い、明治20年には安川商店を芦屋から若松へ移し、さらに明治22年には住居も若松に移した。

明治29年には、敬一郎の次男健次郎を養子に迎えた松本家とともに、安川松本商店を創業した。安川松本商店は、日清・日露戦争によって飛躍的な発展を遂げ、敬一郎はその資産を高等教育機関の設立に充てることとし、私立明治専門学校の創立を進めることとなった。

明治専門学校は、辰野・片岡建築事務所の設計、安川松本商店臨時建築部の施工により、明治41年5月頃に建築工事が着手された。明治42年4月の開校までに本館等の開校に必要な施設は竣工したが、開校後も一部工事が行われ、大正2年6月に完了した。

明治専門学校の建設と並行して、明治に45年に本館棟、女中室棟、大座敷棟、書斎・居間棟、南蔵・北蔵等で構成される「旧安川家住宅」が建設された。このうち、大座敷棟は若松の旧宅からの移築であった。

大正7年に、敬一郎から三男清三郎へ家督相続がなされた後、大正15年（1926年）から敷地北東部の書斎・居間棟を解体・撤去し、敬一郎の隠宅として洋館棟の建築を開始、昭和2年に竣工した。

また、昭和11年に清三郎の死去に伴う長男寛（敬一郎の孫）への家督相続の直後には、本館棟のうち二階建て部分が解体された。その後、昭和12年には、本館棟の玄関部と女中室棟も撤去され、その跡地に日本屋の大座敷付属棟と洋風の本館棟が建設され、正門や塀等の外構も整備された。

戦後、GHQによる接収・解除を経て、再び安川家の住宅として使用されたが、昭和50年代に本館棟は玄関周りを除いて解体された。

3. 北九州市指定文化財への指定

旧安川邸については、北九州を代表する企業家である安川敬一郎とその子息によって明

治期、大正末期、昭和初期の各時代に建築された建築群が一体的に残され、保存状態も概ね良好である。また、約1.3ヘクタールの広大な敷地の中における空間配置や平面構成、竣工当時の資器材や関連図面等多くの資史料も現存し、北部九州における高級住宅史、ひいては日本の近代建築史上、極めて貴重な住宅建築であること等から、平成30年8月に北九州市指定文化財に指定された

■指定物件

旧安川家住宅：本館棟1棟、大座敷棟1棟、南蔵1棟、北蔵1棟、洋館棟1棟

附^{つぱり}：正門、塀、渡り廊下、棟札3枚、洋館棟家具9点

4. 安川家と孫文

孫文は中国清朝を倒し、中華民国を建国した辛亥革命の中心人物である。指導者の孫文とその革命に対し、旧福岡藩士族から成る玄洋社等、九州の人々が支援した。福岡藩士で、北九州地域を代表する企業家となった安川敬一郎は特に資金面で孫文を支援した。敬一郎の二男松本健次郎も協力した。

孫文は革命後、臨時大統領の地位を袁世凱に譲り、大正2年2月13日から3月28日までの44日間、日本政府の賓客として来日している。3月16日には、孫文は安川・松本父子を訪ね、明治専門学校（現・九州工業大学）で講演し、安川・松本家にもその足跡を残した。また、翌3月17日には八幡製鐵所を訪れた。

その後も安川・松本父子は日中親善を持論として、経済・政治・教育等各面の活動に尽力した。